

「ぬくもりをくくる」～温海町関川地区によせて～

現代人である私たちの暮らしは、たくさんの人工素材の製品や大量生産の製品によって成り立っており、生活の中で使われている自然素材は少なく、限られているようです。しかし、自然素材の息づかいが私たちの日々の暮らしにもたらす影響は、極めて大きいのではないのでしょうか。人の心を落ち着かせ、安らぎを与えてくれるその特質は、ときに人工素材製品の利便性を上回る、はるかに魅力的な素材なのです。

特に、古代から生産されている自然素材には、人から人へと伝わってきた、その土地ならではの伝統的な加工技術があります。私たちは、山形県の温海町で生産される「シナ」という素材を知り、わずか四十九戸の関川という地区で現在も生産が続けられている「シナ織」に焦点を当てました。シナ織の歴史は古く、その技術の発祥は1200年前に遡ると言われています。

シナは、「丈夫であること」「水に強いこと」など優れた特質を持つ素材であり、さらにその繊維を加工する技術は極めて高度で特殊なものです。一般的にはあまり知られていません。私たちは、もっとたくさんの人にシナ織の存在を知ってもらい、小さな村の歴史そのものであるシナ織の文化を、次の世代へ確実に伝えていきたいと考えました。

温海町関川地区



シナの木

落葉常緑木。

高さ15～20mになり日本特産。北海道から本州、中国九州、対馬、中国東部等温帯に生育する。

軽軟な材であるが木理は緻密で、調湿効果、音吸、断熱、保温などの材料として広く用いられている。

樹皮が強靱であり、船綱、布、漆・醤油の桶、杖棹等に使用する。

「シナ」という語はアイヌ語で「ぬく・しばる・くくる」などの意味を持つ。



● 関川における現時点での問題点

- ・原木の生産量が少なく、製品が少量生産にならざるを得ない。
- ・一年ガカリの手作業を必要とするため、必然的に製品の価格が高い。
(年間生産量が生産者一人につきわずか10メートルのシナ布だと言われる)
- ・工芸品の愛好家の間では評価が高いが、一般的にはなじみが薄い。
- ・県外からの研修生を受け入れるなど若い技術者の育成をはかっているが、依然後継者不足である。

シナ布ができるまで

～一年がかりの手仕事の工程～



洗う
川できれいに
水洗いする。

洗う
洗ったお蚕糸を、日光にさらして乾かす。



もっとも技術を要する工程である。

染む(しなうみ)
「しな」は「糸」で「染む」は「染める」の意。染めた糸は、染め色によって色合いが異なる。また、染め色によって、また、染め色によって、



染む(しなうみ)

糸のつなを染むには穴をあけ、よりこんで良い糸にかまえていく。
「しな」は「糸」で「染む」は「染める」の意。



つむ(しなうみ)

糸のつなを染むには穴をあけ、よりこんで良い糸にかまえていく。
「しな」は「糸」で「染む」は「染める」の意。



つむ(しなうみ)

糸のつなを染むには穴をあけ、よりこんで良い糸にかまえていく。
「しな」は「糸」で「染む」は「染める」の意。



織る

穴のあいた紙に糸を通し、上下に引っ張って「しな」を織る。かいていく。



つむ(しなうみ)

糸のつなを染むには穴をあけ、よりこんで良い糸にかまえていく。
「しな」は「糸」で「染む」は「染める」の意。



つむ(しなうみ)

糸のつなを染むには穴をあけ、よりこんで良い糸にかまえていく。
「しな」は「糸」で「染む」は「染める」の意。

煮る(しなうみ)

糸のつなを染むには穴をあけ、よりこんで良い糸にかまえていく。
「しな」は「糸」で「染む」は「染める」の意。

煮る(しなうみ)

糸のつなを染むには穴をあけ、よりこんで良い糸にかまえていく。
「しな」は「糸」で「染む」は「染める」の意。

織る(しなうみ)

糸のつなを染むには穴をあけ、よりこんで良い糸にかまえていく。
「しな」は「糸」で「染む」は「染める」の意。

織る(しなうみ)

糸のつなを染むには穴をあけ、よりこんで良い糸にかまえていく。
「しな」は「糸」で「染む」は「染める」の意。



織る(しなうみ)

糸のつなを染むには穴をあけ、よりこんで良い糸にかまえていく。
「しな」は「糸」で「染む」は「染める」の意。

煮る(しなうみ)

糸のつなを染むには穴をあけ、よりこんで良い糸にかまえていく。
「しな」は「糸」で「染む」は「染める」の意。

煮る(しなうみ)

糸のつなを染むには穴をあけ、よりこんで良い糸にかまえていく。
「しな」は「糸」で「染む」は「染める」の意。

提案プランその① 【新たなシナ織製品を提案】

＜現在のシナ布製品＞



のれん・アクセサリー・バッグ・ランプシェード・浴敷などが、現在関川地区及び外部注文によって生産されている。いずれもその用途に対して最適な製品であることから、一般的な生活の中に浸透しにくい面がある。



生活に浸透する製品を・・・

● シナ布を使用した椅子 「シナモック」



コンセプト

- ・人の手のぬくもり・ここちよさ・ぬれを癒す
- ・イスとハンモックの中間イメージ

「生活の中に生きる椅子」として、シナの素材な風合いと、水に強く丈夫な性質を生かし、多くの人に愛用される椅子を考案しました。

横図



イスの特徴

- ・材質はシートにシナ布、フレームに木、とめ具に鉄のボタンを使用。
- ・シナ布を鉄のボタンでフレームに固定することにより布の調整が可能である。（洗濯ができる）

- ・布幅にゆとりを持たせ、座った時体が椅子にゆったりと包むようになっている。



提案プランその② 【シナ織のPR】

● シナ織PRポスター

シナ織の存在は、工芸品愛好家の間では高評価されていますが、製品の生産量が少なく、高価なため、一般的な認知度がまだまだ低い状況にあります。幅広い世代にその存在を広く知ってもらいたい、という思いから、ビジュアルに訴えるイラストレーションを用いて、シナ布のPRポスターを作成しました。

シナ布は、素晴らしい風合いではありますが、そこには関川の長い歴史と、生産する人々の思いが込められています。シナ布からにじみ出る、そのあたたかさ、ぬくもりのようなものを、ポスターで全面的に表現してみました。



● 協力家庭を募る

関川では、シナの原木が少くない事が大きな問題です。そこで、山形県内の家庭に向けて、種苗プランを考えました。家庭に子どもが産まれたときにシナ木を株分けし、家の裏に植樹する。その木を子どもとともに育て、20年後、成木になったシナを関川に送る、というプランです。家族の生活の一部として、毎朝にわたりシナ木の栽培に協力してもらおうがわりに、関川地区では子供たちのための体験学習をもつて、小学生になった子どもにシナ木の工程を体験させます。子どもが成人を迎える年、シナ木を伐採して加工にまわすと同時に、成人記念として、関川からシナ製品を家庭に贈り、還元するのです。このプランによって、関川では原料となる木の植樹に協力を得ることが可能となり、各家庭では森に緑を増やすと同時に、誕生時と成人時の記念を形として残すことができるわけです。子どもたちにとっても、シナを育成したり、シナ木を体験する事で自然素材の大切さを知り、ガツ山形の伝統技術であるシナ織を学ぶよい機会になるはずですよ。

● 子どもが誕生した年に申し込みをする → 「シナ木を育てたい！」

● 植樹



● シナ木を株分け



子どもが小学生になったら、夏休みなどを利用してシナ織体験をさせる。

● 20年後、子どもの成人とともに、生育したシナの木を伐採する



関川



協力家庭



● シナ布を使った製品「シナモック」を20歳の記念に贈る

「シナ織の価値を下げずに、たくさんの人知ってもらおう」。私達はこの研究をとおし、地元山形県の伝統技術への理解を深めるとともに、そんなねらいを持ちました。そうすることで、シナ織技術の存続、ひいては後継者不足の問題の解決につながるのではないかと考えたからです。もっとたくさんの人々にシナ織の存在を知ることができたなら、全国のあちこちでシナ製品が見られる日も近いかもしれません。
取材に御協力頂いた関川地区の皆さん、どうもありがとうございました。